

令和6年度厚生労働行政推進調査事業費補助金
(地域医療基盤開発推進研究事業)

臨床検査技師、臨床工学技士、診療放射線技師のタスクシフティング/
タスクシェアリングの安全性と有効性評価（臨床検査技師の対応事例）

分担研究報告書（令和6年度）

研究分担者 益田 泰蔵 一般社団法人 日本臨床衛生検査技師会 常務理事
研究協力者 深澤 恵治 一般社団法人 日本臨床衛生検査技師会 専務理事
研究協力者 板橋 匠美 (一般社団法人 日本臨床衛生検査技師会 主幹
東京医療保健大学 総合研究所 客員准教授)

研究要旨

2024年度研究は、これまでの法改正された行為を先駆的に実施している好事例施設に追加して、他の行為を調査・検証を行った。

実施行為としては、「持続皮下グルコース検査」「内視鏡用生検鉗子を用いて消化管の病変部位の組織の一部を採取する行為」を2施設に対して調査した。

調査結果として、医師や看護師の負担軽減や患者の待ち時間の短縮などの効果がみられ、その有効性が確認された。また安全性についてもインシデント及びアクシデントの増加等も認められず安全に行われていた。

好事例施設において、タスク・シフト/シェアを進めるために、医師や看護師等の他職種とコミュニケーションを取りながらタスク・シフト/シェアすることが重要であった。

A.研究目的

2022年度、2023年研究において、タスク・シフト/シェアを先駆的に実施している好事例施設を調査し、その実施体制等を確認、検証を行った。実施行為として「静脈路確保」「超音波検査のための造影剤注入」「運動誘発電位検査」「体性感覚誘発電位検査」を行ったため、2024年度は他の法改正された行為「持続皮下グルコース検査」「内視鏡用生検鉗子を用いて消化管の病変部位の組織の一部を採取する行為」について調査・検証を行う。

B.研究方法

「持続皮下グルコース検査」は、社会福祉法人恩賜財団済生会支部東京都済生会 東京都済生会中央病院：東京都港区（以下、「済生会中央病院」という。）、「内視鏡用生検鉗子を用いて消化管の病変部位の組織の一部を採取する行為」は、国立研究開発法人 国立国際医療研究センター病院：東京都新宿区（以下、「国際医療研究センター病院」という。）において、現地視察を行い現状調査した。調査内容は、実施体制の確認、インシデント/アクシデントの発生状況等を行った。

C.研究結果

1. 済生会中央病院 (523 床)

医療機能として特記することは、臨床検査室の品質と能力に関する特定要求事項に関する国際規格である ISO 15189 を取得している。

【背景】

これまでも持続皮下グルコース検査に臨床検査技師が携わってきたが、2023 年 12 月よりセンサー装着を看護師から臨床検査技師にタスク・シフトを開始した。

【取組内容】

済生会中央病院における持続皮下グルコース検査の導入は 2013 年 3 月に持続グルコースモニタリング（以下、「CGM」という。）である iPro2 を導入し、2018 年 2 月にフラッシュグルコースモニタリング（以下、「FGM」という。）リブレ Pro を導入した。また 2019 年 1 月に ISO 15189 取得に伴い FGM 手順書の改訂を実施した。

2023 年 12 月からセンサー装着のタスク・シフトを開始するため、年間行動計画として、開始前までにタスク・シフト/シェアに関する厚生労働大臣指定講習会の受講を修了するとともに、

1. 4 月～6 月

- ① 臨床検査科内への周知
- ② 診療科との調整

2. 7 月～9 月

- ① FGM リブレ Pro の同意書の改訂
- ② 手順書の改訂準備

3. 10 月～12 月

- ① 看護師による手技講習会実施
- ② 手順書改訂
- ③ 当院適正化委員会での報告
- ④ 導入開始

とした。

【成果】

安全性について、済生会中央病院が FGM

検査を導入した 2018 年 2 月からタスク・シフト後の 2025 年 3 月まで出血や皮膚トラブルなどのインシデント事例は発生していない。ただし、患者が放射線検査を受ける際に、他院で CGM を装着し来院した事例や患者個人で自費購入し装着していた事例があった。2018 年 2 月から 2 例あり、医療安全管理部門へ報告するとともに改善策として患者に向けたポスター掲示や看護師からの予約時の説明等によりそれ以降は発生していない。

また隣接する糖尿病外来の認定糖尿病看護師や看護師とも連携し安全性向上に努めていた。

有効性として、診療の補助や処置の途中で看護師に依頼することが無くなったため、看護師の負担軽減となっていた。また患者にとっても検査説明からセンサー装着、起動までにかかる時間が短縮された。

2. 国際医療研究センター病院 (749 床)

医療機能としての特記は済生会中央病院と同様に ISO 15189 の認定を受けており、また特定機能病院である。ただし内視鏡センターは臨床検査室ではないため、ISO 15189 の認定範囲外である。

【背景】

医師の働き方改革の一環として、2022 年 4 月から内視鏡センター所属で専従の臨床検査技師 1 名を配置し、業務介入を実施した。

【取組内容】

当初の内視鏡診療体制は、消化器内科医師と外来部門看護師で行っていたが、専従の臨床検査技師を配置し業務範囲の見直しを行った。

業務内容は、①検査・治療の介助②内視鏡機器・システム・物品の管理③病理検体などの処理業務④洗浄履歴管理を定期的に医師及び看護師と検討を行った。

【成果】

消化器内視鏡診療において、法改正された行為「内視鏡用生検鉗子を用いて消化管の病変部位の組織の一部を採取する行為」をタスク・シフトするだけではなく、関連の周辺業務においてもタスク・シフト/シェアすることにより安全性や有効性が認められた。

インシデント・アクシデントレポートの件数は、介入前 2021 年度：3 件であったが、介入後 2022 年度：1 件、2023 年度：2 件、2024 年度：0 件と減少傾向がみられた。

医師からタスク・シフトした業務について、2022 年は対象件数 7,461 件、介入数 2,209 件、介入率 30%、総時間 398 時間 4 分であったが、2023 年は対象件数 7,211 件、介入数 4,555 件、介入率 63%、総時間 568 時間 33 分と有効性が認められた。

臨床検査技師が適切に管理することにより、内視鏡機器修理実績が 2021 年度は約 924 万円、2022 年度は約 457 万円と約半減した。

業務効率化による患者待ち時間も減少し、上部内視鏡検査の待ち時間を比較した結果、介入前 9.8 分/件から、介入後は 6.8 分/件と減少した。また最終検査終了時間も介入前は平均 16 時 05 分に対し、介入後は平均 15 時 50 分と約 15 分短縮した。

D. 考察

今回調査した 2 施設は、タスク・シフトが適正に行われており、安全性及び有効性等が認められた。

「持続皮下グルコース検査」は、法改正が実施された行為のうち、他の行為に比べ多くの施設で行われている（令和 5 年度日臨技施設実態調査より）。

済生会中央病院においては、以前から糖尿病診療に携わっていた経緯もあり、センサー装着のタスク・シフトもスムーズに行われていた。認定糖尿病看護師をはじめとする糖尿病外来との連携を行うことでよりスムーズに

実施されていた。

国際医療研究センター病院における「内視鏡用生検鉗子を用いて消化管の病変部位の組織の一部を採取する行為」については、2022 年 4 月から内視鏡センターに消化器内視鏡技師の資格を有する臨床検査技師が専従で配属されている。当初は 1 名であったが、現在は 2 名体制で業務を実施していた。内視鏡診療において、法改正の行為のみならず、周辺業務を含めて他職種とコミュニケーションを取りながらタスク・シフト/シェアすることが重要であった。

E. 結論

医師の業務負担軽減や労働時間短縮のためにタスク・シフト/シェアが各施設で実施されてきている。実施状況を確認すると各施設での事情にあわせて、有効にそして安全に実施されていた。

F. 研究発表

1. 論文発表

該当なし

2. 学会発表

・第 74 回日本医学検査学会 2025 年 5 月 10 日－5 月 11 日

G. 知的財産権の出願・登録状況

（予定を含む。）

1. 特許取得

該当なし

2. 実用新案登録

該当なし

3. その他

該当なし